

- 1  **Advanced School of Theology 『福音主義終末論：再考』信徒セミナー  
講義①②と③④の幕間：前半のまとめと後半への導入として**

世の終わりと教会の霊性

— 苦難と迫害を通して栄光に至るという霊性の道筋 —

〒671-4135 兵庫県宍粟市一宮町安黒332

一宮基督教研究所

安黒 務

<http://www.aguro.jp>

aguro@mth.biglobe.ne.jp

- 2  **岡山英雄著『小羊の王国』より**

第二次大戦中、軍による政治的支配は、国家神道に基づく天皇崇拜と深く結びついていた。独裁者は、祭神として宗教的権威を持ち、熱狂的な民族主義と結びついて、破局へと国民を駆り立てたのである。当時、日本の教会は、黙示録13章の、二匹の獣の意味を理解することができず、「獣」の礼拝と「小羊」の礼拝を同時に行い、ついに証人としての力を失った。

- 3  **岡山英雄『患難期と教会』より  
①世の終りにおける「患難期」の重要性**

1. 千年期と患難期
2. 進歩主義的歴史観
3. 千年期後再臨説
4. ディスペンセーションナリズム
5. 患難期後再臨説

- 4  **①世の終りにおける「患難期」の重要性  
1. 千年期と患難期**

1. 「千年王国」の解釈が議論の焦点
2. もうひとつの、おそらくより重要な側面の考察
3. 「患難期」の問題
4. 黙示録「42ヶ月」(11:2, 13:5)、「1260日」(11:3, 12:6)、「ひと時とふた時と半年の間」(12:14)
5. 一年を360日とするなら、「三年半」という同じ長さ
6. ダニエル書の「ひと時とふた時と半時」(7:25, 12:7)との関連から、終末における神の民の苦難を象徴
7. キリストの来臨に先立つ神の民の苦難の時
8. 11章から13章の記述にとどまらず、17章から18章の大バビロンの物語、また6章、8章から9章、16章の封印・ラッパ・鉢の三つの災いとも結びついて、4章から18章全体
9. 「三年半」はまた、最終的審判に先立つ、三つの災いの部分的審判を通して、神が人間に警告を与える時であり、前触れとしての裁きによって、人々が悔い改め、神に立ち返る機会を与える時

- 5  **①世の終りにおける「患難期」の重要性  
2. 進歩主義的歴史観**

1. 楽観的、「進歩主義的」な歴史観
2. 四世紀まで教会は、小さく弱く、迫害される存在
3. すでに患難の中にあり、やがてより大きな患難の来ることを知りつつ、殉教をも恐れず証言
4. 現実の悪の力を完全に打ち破るキリストの来臨は、切なる願い

5. コンスタンティヌス帝のキリスト教公認、さらに国教化
6. キリストの来臨への切実な待望は失われ、地上の患難期は実際的な意味を持たなくなった。
7. カトリック教会の成立と発展にともない、「公認」の見解
8. 宗教改革においても、ルターやカルヴァンも終末論に関しては、中世の基本的な枠組みをほぼ踏襲
9. 「文明化」という植民地支配的な宣教論
10. 科学の発達にともなう「技術的ユートピア」

#### 6 ■ ①世の終りにおける「患難期」の重要性

##### 3. 千年期後再臨説

1. 教会の黄金時代、地上の「千年王国」の後に、キリストが来臨
2. 終末的患難に関する預言のほとんどは、70年のエルサレム崩壊で成就
3. オリーブ山でのイエスの「苦難の日」についての預言、パウロの「困難な時代」についての警告(Ⅱテモテ3章)、黙示録の「獣の国」との戦いへの備えを無視したもの
4. 患難期における教会のあり方を研究することは、教会とは何か、世界とは何か、歴史とは何かを問うこと
5. 表面的な事象に目を奪われることなく、それを動かしているものの実体を見極め、その奥に潜む闇の力と戦いつつ、なおそれを超えた勝利と希望に生きる

#### 7 ■ ①世の終りにおける「患難期」の重要性

##### 4. ディスペンセーションナリズム

1. 患難期についての詳しい研究はディスペンセーションナリズムの神学者たち
2. 19世紀半ば、イギリスのJ.ダービィら
3. 20世紀にアメリカでファンダメンタリズム運動と結びついて急速に広まった
4. 預言の研究に力を注ぎ、聖書の歴史性を強調し、終末への関心を引き起こしたという点では大きな意義
5. ひとつの根本的な問題をはらんでいる
6. 「患難期前携挙説」
7. 教会とイスラエルを峻別して、患難期に、教会は携挙されて天にあり、イスラエルは地上に残される
8. 単なるカレンダー的興味から、世界歴史のこれからの動向を予測
9. 天に挙げられた教会にとって、地上の患難期は本質的に無関係
10. 患難期と教会の関係、とくに苦難の中にある教会のあり方についての分析が全く欠落

#### 8 ■ ①世の終りにおける「患難期」の重要性

##### 5. 患難期後再臨説

1. 患難期前携挙説が釈義的に成り立ち得ないーラッドとワルブードの1950年代の論争
2. 教会史においてきわめて歴史の浅い特殊な説ー18世紀に至るまで、このような終末論は存在しなかった
3. 近年、この説には大きな変化があり、「漸進的ディスペンセーションナリズム」と呼ばれる説をとる者たちは患難期前携挙を不可欠のものとは考えない
4. 黙示録の記述のほとんどは、患難期にかかわるー患難の時代における神の民のあり方、警告と励まし、戦いと勝利
5. 黙示録4:1で教会は携挙され、4章以下は地上に残されたイスラエルのためのものであるとするが〔ワルブード〕、現代の主要な注解者で、このような解釈を支持する者はいない。
6. マタイ24:1-31は、反キリストの出現、患難期、続いて再臨という終末的順序
7. Ⅱテサロニケ2:1-12によれば、教会は、反キリスト(不法の人、滅びの子)の支配する患難期を通して再臨の主に会う
8. 患難は教会にとって避けるべきものではなく、教会の地上における本質的なあり方
9. 神の民は「多くの苦しみを経て」使徒14:22、苦難によって練られ、清められ、純化されて(詩篇66:10,ダニエル11:35、セカリヤ13:9、マラキ3:2,3)、神の国に入り、再臨の主に会う。

## 9 ■ 岡山英雄『患難期と教会』より

## ②世の終りにおける「患難期」と「神の民の靈性」

1. 神の民と迫害
2. 神の民の保護
3. 神の民の証言

## 10 ■ ②世の終りにおける「患難期」と「神の民の靈性」

## 1. 神の民と迫害

1. 「三年半」とはどのような期間
2. 神の民の迫害—「聖なる都」が異邦人によって踏みにじられる時—「海から上ってくる獣」が活動し、全世界を支配する(13:7)時
3. 四つのシンボル、「竜」(12章)、「海の獣」(13章)、「地の獣」(13章)、「大淫婦」(17-18章)—悪の諸力を統括する「悪魔」は「大きな赤い竜」
4. 「海から上ってくる獣」—政治的権力、軍事力による支配
5. 「地から上ってくる獣」—宗教的權威による支配
6. 「大淫婦」—経済的な繁栄と道德的頹廢

## 11 ■ ②世の終りにおける「患難期」と「神の民の靈性」

## 2. 神の民の保護

1. 神の民は完全に守られる
2. 「42ヶ月」の間、踏みにじられる
3. 「神の聖所と祭壇、そこで礼拝している者」は、測りざおによって測られ、守られる(11:1)
4. 「女」の産む「男の子」(キリスト)が、彼を食い尽くそうとする「竜」から守られ神の御座に引き上げられた
5. 「女」(教会)もまた、激しく追い迫る「竜」から逃れ、大鷲の翼を与えられ、荒野へ飛んでゆき(12:14)、「神によって備えられた場所」で「1260日」の間(12:6)、「ひと時とふた時と半時の間」(12:14)、かくまわれ、養われる
6. 神の守りは、迫害の中でも完全

## 12 ■ ②世の終りにおける「患難期」と「神の民の靈性」

## 3. 神の民の証言

1. 積極的に困難の中でも証言を続ける期間
2. 「ふたりの証人」の幻—「1260日」の間、「二本のオリーブの木」、「二つの燭台」—全地の主の御前で預言(11:3-4)
3. 証言のために、火によって敵を滅ぼし、天を閉じ、水を血に変え、災害によって地を打つ力
4. 「死に至るまでもいのちを惜しむことなく」、小羊の血と自分たちの「証言のこぼれ」のゆえに「竜」に打ち勝つ(12:11)
5. 彼らは屈することなく、「竜」の手先である「大バビロン」の迫害の中でも、「イエスの証人」(17:6)として生涯を全うする

## 13 ■ 岡山英雄『患難期と教会』より

## ③世の終りにおける「患難期」とはいつなのか

1. 「三年半」の過去性
2. 「三年半」の未来性
3. 「三年半」の現在性
4. 苦難から栄光へ

## 14 ■ ③世の終りにおける「患難期」とはいつなのか

## 1. 「三年半」の過去性

1. 「三年半」とはいつのことなのだろうか
2. 「三年半」は過去、現在、未来のそれぞれに深く関わっている

3. このような「時」に関する理解こそが、黙示録の解釈、また聖書の核心
4. まず「三年半」は、過去の性格
5. 執筆された一世紀末—ローマ皇帝ドミティアヌス帝による迫害—「イエスにある苦難」(1:9)
6. 「サタンの会衆」によって「ののしられていた」(2:9, 3:9)
7. 海の獣、地の獣、大バビロンが、一世紀のローマ帝国の政治的、宗教的、経済的側面を象徴
8. 一世紀末、教会はすでに苦難の「三年半」の中にあった
9. 患難の中にある同時代のキリスト者を慰め励ますために書かれた

#### 15 ■ ③世の終りにおける「患難期」とはいつなのか

##### 2. 「三年半」の未来性

1. 未来の苦難をも意味する
2. 終末において神の民を迫害する悪の力—「反キリスト」(Ⅰヨハネ2:18)「荒らす憎むべき者」(マタイ24:15)「不法の人、滅びの子」(Ⅱテサ2:3)「海からの獣」(黙13:1)
3. 来臨直前に現れる巨大な悪の力
4. 黙示録17章「獣」は「今はいない」、そして「やがて」底知れぬところから上って来る(17:8)
5. この「獣」は「竜」や「にせ預言者」とともに、全世界の王たちをハルマゲドンの戦いのために集める(16:12-16)
6. キリストの来臨に先立つ、未来的、終末的な戦い
7. 未来の来臨直前の全世界的な迫害の時代

#### 16 ■ ③世の終りにおける「患難期」とはいつなのか

##### 3. 「三年半」の現在性

1. 現在性を持つ
2. 一世紀や、来臨直前に限定されることなく、教会の全歴史を貫いて普遍的
3. 二千年近いキリスト教史と関連づけるなら一象徴的な期間
4. 「ふたりの証人」—「二つの燭台」—「燭台」は「教会」である(1:20)—教会論的な理解がふさわしい
5. 地上に立てられた神の教会が、「世の光」として証言を続ける働きの全体—あらゆる時代の、教会の証人としての役割に関係
6. 未来の大きな患難が、現在の苦難と質的に連続している
7. 全時代の教会の受けている苦難と、質的には連続
8. 来臨の前に、それまでは局地的であった迫害が、全世界的な規模に拡大

#### 17 ■ ③世の終りにおける「患難期」とはいつなのか

##### 4. 苦難から栄光へ

1. 黙示録の終末論、いや聖書の終末論の核心
2. 患難期における教会のあり方への深い洞察に基づいた励まし
3. 神の保護は完全であり、証言を続けて、殉教をも恐れることはない
4. 混在しつつ成長し続けていた「麦」と「毒麦」(マタイ13:30)—それぞれの本質的な特徴をあらわに
5. 神の国と獣の国が鋭くせめぎあい—その究極の姿を明らかに
6. 地上の民は、神の国の民と獣の民とに二分されてゆく
7. 獣の民は、大バビロンの不品行の「黄金の杯」(黙17:4)から飲み、「獣の刻印」(黙13:16)を受ける
8. 神の民は、キリストの血による「新しい契約の杯」(Ⅰコリント11:25)から飲み、生ける「神の名」(黙3:12, 22:4)を額に記される
9. イエスが十字架の苦難を経て、復活の栄光を受け、天に着座されたように、キリストの教会も、地上の患難を通して、栄光に輝く天のエルサレムの門をくぐる
10. やがてキリストの来臨によって闇の力は完全に滅ぼされ、すべてが新しくされ、神の栄光のみが輝きわたる

#### 18 ■ 安黒務「比較宗教学(宗教の神学)」講義より

##### ④聖書と黙示録の「世の終りと教会の霊性」へのメッセージを日本の教会史にあてはめる

1. 十戒と日本キリスト教史
2. 大和朝廷以来の天皇制のもつ宗教性と北イスラエル王国ヤロブアムの罪
3. まとめー苦難と迫害を通して栄光に至るという霊性の道筋

19 ■ ④聖書と黙示録の「世の終りと教会の霊性」へのメッセージを日本の教会史にあてはめる

1. 十戒と日本キリスト教史

1. 「あなたには、わたしのほかにほかの神々があってはならない。」モーセの十戒の第一戒
2. これほどまでの災難に見舞われながらもなお神の民を「奴隷の状態」に縛り付けておこうとする「エジプトの国」の恐るべき執着
3. 第一期「キリシタン」の時代(1549-1867)
4. 第二期「国家神道と教育勅語」の時代(1868-1945)
  1. ①天皇制を幹とし、キリスト教を枝とする「伝統主義」タイプ、②天皇制とキリスト教を楕円の二つの中心にして共存させる「共存」タイプ: A. 天皇制肯定型「共存」タイプとB. 天皇制否定型「共存」タイプ、③天皇制とキリスト教を対立するものとする「対決」タイプの三タイプ四種類
  2. 天皇制肯定型「共存」タイプのクリスチャンは、戦争中に強要された神社礼拝、宮城遥拝、御真影(天皇や皇后の写真)や神棚への拝礼に対しても、それらは「信仰の事柄」ではなく「愛国心の事柄」として従った人々です。…その人々は「形では神社や御真影に拝礼し、心の中では神に祈った。…何の矛盾も感じなかった。」という回答を寄せています。国家は巧妙なたちで国体(国のアイデンティティ)への従属をせまり、多くのクリスチャンが妥協に追い込まれました。国家神道教育と時代の風潮の恐ろしさ
5. 第三期「平和憲法と教育基本法」の時代(1945-2006)
  1. 改訂教育基本法的美辞麗句の裏に「パロとその家臣たちは民についての考えを変えて言った。『われわれはいったい何ということをしたのだ。イスラエルを去らせてしまい、われわれに仕えさせないとは。』」(出14:5)というクリスチャンに対する仕掛け

20 ■ ④聖書と黙示録の「世の終りと教会の霊性」へのメッセージを日本の教会史にあてはめる

2. 大和朝廷以来の天皇制のもつ宗教性と北イスラエル王国ヤロブアムの罪

1. 大和朝廷以来の天皇制のもつ宗教性
  1. 日本の政治と教育における右傾化の流れ
  2. 政治の原点ー二つのキーワード: 『憲法』、『教育基本法』
  3. 自分の国の歴史、伝統、文化に誇りが持てない教育は、国の存亡を危うくする
  4. 元号法制化運動、…国旗国歌法の制定
  5. 『天皇を中心とした神の国』こそ、日本の政治の根幹
  6. 天皇家の宗教である皇室神道、天皇家の祭祀
2. 大和朝廷以来の天皇制のもつ宗教性と北イスラエル王国ヤロブアムの罪
  1. 北イスラエル王国が建国以来内包した偶像礼拝との類似性
  2. 子牛はユダからのイスラエル独立の象徴
  3. ヤロブアムは子牛礼拝を北王国の民の心に深く植えつけたので、王国が滅亡するまでこれはついにぬぐい去ることができず、北王国の王十九名はみな金の子牛礼拝に従いました。
  4. 日本の多くの政治家、教育界指導者にとって「日本のアイデンティティの中核」
  5. 「大和朝廷による統一国家の成立、つまり建国以来日本の神々を祀る司祭者としての天皇、現人神としての天皇の宗教的権威」に置かれている

21 ■ ④聖書と黙示録の「世の終りと教会の霊性」へのメッセージを日本の教会史にあてはめる

3. 苦難と迫害を通して栄光に至るという霊性の道筋

日本福音主義神学会全国研究会議で神戸改革派神学校校長の牧田吉和師は、その講演「三位一体論的・終末論的・神の国的霊性の展開」の中の「対国家との関係における神の民の霊性」: 「キリストのみを唯一の王と告白し、キリストの王的支配の下に生きようとする時(聖霊に導かれて生きる者は必ずそのように生きる者である!)、最大の脅威となりうるのは国家的脅威であることは歴史が証明してい

る。すなわち、国家的権威が悪魔的な力を帯び始める時、キリスト教的靈性はあらゆる点で危機にさらされるからである。あらゆる領域において悪魔的な力に脅かされるのである。この問題は、日本の教会が歴史的に経験し、今も現実に置かれている状況を考える時、どれほど真剣な問題であるかが容易に理解できるはずである。ヨハネの黙示録を靈性の観点から読むならば、少なくともこの点はずすことはできないはずである。この問題を考慮する時、苦難と迫害を通して栄光に至るという靈性の道筋は最も鋭い意味合いを持ってくることになる。今一度指摘しておくが、この問題を考慮しない靈性理解は、特に日本の教会を念頭に置く時、致命的な欠陥を持つものとなるであろう。」

## 22 ■ さらなる神学的思索のための 文献紹介、そしてICI資料

- 岡山英雄『小羊の王国』
- 岡山英雄「患難期と教会」
- 稲垣久和著『大嘗祭とキリスト者』
- 牧田吉和師講演「三位一体論的・終末論的・神の国的靈性の展開」―「対国家との関係における神の民の靈性」
- 2012/02/29 日本福音教会月刊誌連載論稿 安黒務『ローザンヌ誓約と日の丸・君が代・天皇制問題』A. 日の丸・君が代問題の歴史：①戦前まで、②戦後、③逆コースと呼ばれる政治の反動、B. 日の丸・君が代問題の裁判：①判決への視点、②維新の会への抗議文、③聖書の解釈と適用、④憲法の解釈と適用、C. 藤林長官の見識：①国家と宗教、②目的効果基準、③解釈改憲、④政教分離、⑤神道指令、⑥政教の癒着、⑦目的・効果基準、⑧祭祀、⑨人権の蹂躪 三月号にて半年間にわたる「日本福音教会月刊誌」への『ローザンヌ誓約と日の丸・君が代・天皇制問題』連載 500円
- 2011/06/01 関西聖書学院 安黒務『日の丸・君が代』起立斉唱条例と処罰条例問題を神学的に思索する道筋の検討：特別講義DVD, 2000円→特別価格1000円[レジュメ、送料込]
- 2009/01-06 日本福音教会月刊誌連載記事 安黒：2009年度“What JEC ?”：使徒信条とJEC信仰告白にみるエリクソン神学：ブックレット 500円
- 2006/4-2009/1: 生駒聖書学院：生駒聖書学院講義：安黒：宗教の神学：講義録：DVD[811分]+資料＝定価 13500円
- 2007/01-06: 日本福音教会月刊誌連載記事：安黒：“How JEC ?”：「十戒」シリーズ：ブックレット 500円
- 2007/07/03: 西宮福音教会：日本福音教会牧師会研修会：吉野・安黒：「憲法改訂問題とJEC」DVD[1枚]+資料＝2500円